

# 帽子に潜む 密かな芸術

文 ジェローム・コワニヤール  
写真 ジェローム・ガラン

オートクチュールのランウェイに登場する彫刻のように繊細な婦人用の帽子。帽子木型は、それらを制作する職人にとって、欠かせない道具だ。フォルミエ（帽子木型職人）のロレンツォ・レは、優れた木型を生み出す魔法の手を持っている。

パリの賑やかなブルス地区からさほど遠くないところに、車が入り込まない一本の通りがある。かつてル・ブチ・シユマン・エルブ（「草の小道」の意）と呼ばれたこの通りは、今もなお閑静な雰囲気を残している。街路に面した石造りの大きなアーチや、彫刻を施した観音開きの木の扉からそれと分かる18世紀の貴族の館のなかに、フォルミエ界の貴族ともいべき希有な職人、ロレンツォ・レの工房がある。婦人用の帽子を制作あるいは販売する「ミリナー」と呼ばれる職人に対しては、多くのことが知られているのに対して、フォルミエという職業は、世間にはほとんど知られていない。だが、木型をつくる彼らの貢献なくして帽子職人の仕事は成





り立たない。それこそ、柄の取れたナイフのようなものだ。フォルミエとは、帽子職人の創作活動の基盤となる木型を彫刻する職人なのである。これはもちろん、数世紀に及ぶ歴史を受け継ぐ伝統的な帽子製造業の世界での話であって、そうした繊細さが入り込む隙もない工業製品の世界には、あてはまらない。

ロレンツォ・レが彫刻の道に進んだのは、木がとてつもなく好きだったからだ。イタリアのピアチェンツァで生まれた彼が、この仕事に初めて興味を持ったのは、10歳の時。とある田舎の木工の作業場で、そこに宿る不思議な力に魅せられてしまったのだ。焼きたてのパンから立ちのぼる、温かく幸せな匂いに似た、木の香り。年齢を重ねた今も、好奇心旺盛な子どものようにきらきらと瞳を輝かせながら、彼は回顧する。「普段は、荷車や手押し車、樽などのほかに、ブドウを詰める箱なんかもつくっているような、田舎によくいる大工さんだったね」。

それから2年後、ロレンツォは毎週土曜日にスケッチを習い始めた。その後すぐに彫刻も学び始め、グラッツァーノ・ヴィスコンティ村にあるヴィスコンティ・デイ・モドローネ専門学校に進学した。校舎は、映画監督ルキノ・ヴィスコンティが少年期を過ごした、中世の城の一角にある。それは、監督の父、グラッツァーノ・ヴィスコンティ公爵ジュゼッペ・ヴィスコンティ・デイ・モドローネが廃墟となっていた城を再建したもので、鍛鉄と木彫を専門とする工房も設けている。

ロレンツォは、この由緒ある学校で木彫という高尚な職業を身につけて卒業した。帽子との出会いは、休暇をパリで過ごしていた時に偶然訪れた。彼に新たな情熱が宿ったのは、またしても作業場——フォルミエだった叔父の工房のことだった。1970年代初頭、19歳のロレン



ツォは、その仕事に心を奪われ、2、3ヶ月の間、そこで働かせてもらうことにした。1962年に叔父が開いたその工房を、後に自分が引き継ぎ、職業人生を送ることになるとは思いもせずに。1960年代当時、その地区では、8人ほどのフォルミエがアトリエを構えていたが、帽子制作に関わる職人の多くがそうであったように、彼らのほとんどがイタリア人だった。その工房では、20世紀初頭まで、帽子に使う羽飾りの染色が行われていた。ふたつある部屋には、大きなガラス屋根から光が差し込んで、一方の部屋には、大きな丸鋸とプレス機、そしてこれからロレンツォがブロックに切り分ける、加工前の厚板が置かれている。彫刻の作業は、もう一方の部屋に設えられた、大きな作業台で行われる。そこには、数十年の間につけられた、大きな作業台で行われる。それら

られたりしてできた無数のくぼみや溝が刻まれている。その

に掲載され、世界中で紹介されている。

納期は、多くの場合、非常に短く、オートクチュールのショーに向けた準備が始まると、朝から晩まで休む暇もない。ロレンツォは、帽子職人界のスターで超一流の腕を持つフィリップ・トレシーと定期的に仕事をしており、「彼ら荷物が届くと、何が入っているかわくわくする」と言う。ロンドンを拠点に活動するトレシーは、その豊かな創造力で知られているが、ロレンツォは彼のために、重さが約60キロもある巨大な木型をつくったことがあり、その制作には17日を要している。英国のウィリアム王子とキャサリン妃の結婚式で着用された帽子のほとんどは、ロレンツォの木型でつくられたものだ。

ロレンツォの妻ルーシーは、スケッチをもとに、スバルテリーと呼ばれる帽子のプロタイプを、稲わらを用いてつくる。彼女が使用する日本産の極細の稲わらの繊維

【当ページ】  
ロレンツォ・レは、パリの工房で数多くの帽子木型を制作している。妻のルーシーと仕事場にて。  
【次ページ】  
シルクハットやクチュールの凝ったハット、1970年代にロンドンで展示されたオートバイ用のヘルメット(26ページ)などのデザインを形にするために、特別な道具を使用している。



## ロレンツォの作業台には、さまざまな 道具類が並べられている。それらはまるで 出撃の合図を待つ小人の軍隊のようだ。

台には、丸鑿、平鑿、ビュランなどの道具類が並べられている。その数、百本はあるだろうか。まるで、出撃の合図を待つ小人の軍隊のようだ。木製やゴム製のハンマーを使う必要が特になければ、ロレンツォは手のひらでそれらの道具を扱う。木は割れやすい素材なので、大切に扱わなければならない。ロレンツォは、帽子の木型には、きめが細かく柔らかくて丈夫なボダイジュ材を使う。一方、トルソーやディスプレイスタンド、彫像などの場合は、オベチエ材を使う。これは、砂地で育つ珍しい木材で、繊維に二酸化ケイ素の微粒子を含むため、ブレードの切れ味がすぐ鈍る。そこで、刃を研ぐという地味な作業のために、手が届くところに小さな砥石を置いている。鋼鉄製の秀逸な道具をつくるメーカーはバリーに1社しか残っていない。30年間、研ぎながら使い続けたブレードは、もとの半分の長さになってしまった。

彫刻が終わると、石目やすりやサンドペーパーで入念に磨いていく。最後にほこりを払えば、あとは発送を待つだけだ。木型の表面にワニスや塗料を薄く塗ることで、帽子職人が蒸したコーン型のフェルトを成型できるようになる。このフェルトの原型は、糸とピンで木型に固定され、乾燥窯に格納される。何千本ものピンで刺され、乾燥窯に長時間置かれても、ボダイジュの木型は20年間から40年間の使用に耐える。シンプルな木型なら2日ほどできるが、着脱式のパーツが付属するものになると、数週間かかることもある。

素材のフェルトよりも大量生産の完成した帽子の方が安く買えるこの時代、伝統的な木型を調達する余裕があるのは、ラゲジュアリーなデザイナーブランドか帽子メーカーに限られる。ロレンツォの工房は、シャネル、ジバンシー、クリスチャン・ディオールなどの超一流のメゾンや世界中の帽子職人と仕事をしている。叔父は4、5人の職人を雇い、チームで仕事をしていたが、ロレンツォは工房で唯一のフォルミエだ。妻のルーシーは、スバルテリーの制作に加えて顧客対応や受注業務もこなしている。パリに残ったフォルミエも、ひとりまたひとり引退し、工房を閉めていく。この類希な職業は消えゆく運命にあるのだろうか。孫が最近この工房でつくった小さな木製のオブジェを、ロレンツォは誇らしげに見せてくれた。かつて彼がそうだったように、木に心を奪われた少年が、いつの日かこの工房を引き継ぐのだろうか。孫はまだ10歳。だが、それはロレンツォがこの天職と出合ったのと同じ年だ。

「パテック・フィリップ マガジン・エクストラ (patk.com/owners) にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧くださいませ。」

[当ページ]  
デザインを彫刻する作業に没頭するロレンツォ。繊細なボダイジュ材を加工するには、一定の力を保ち続ける根気と、あるバリーの製造業者でしか買えない鋼製の道具が不可欠だ。  
[前ページ]  
帽子とスカーフのディスプレイに使用される、ボダイジュとマホガニーを用いた、優美なツートンカラーの胸像。

は、値が張るため、今ではほとんど使われていない。最初に稲わらで織った素材を湿らせ、次に熱くしたアイロンをあてながら、形を整えていく。そうしてできたプロトタイプをもとに、木型をつくる。片隅に、帽子職人に原型として提供されるスバルテリーが見える。それは軽やかで、今にも鳥のように飛び立っていきそうだ。キャップやシンプルな帽子の場合、木材ブロック1個で木型をつくれるが、つばの広いものになると、複数のブロックをねじプレス機で24時間圧着させたものを使用する。理由は単純で、「1個だと割れてしまうことがあるから」だと言う。複雑な木型の場合、相当数の部材が用いら

れる。こうしてできた立方体のブロックは、ブレードの下で巧みに操られ、円筒形に加工されていく。しかし、職人にとつて、ここまでは第一段階に過ぎない。鉛筆やコンパスを使って、木のブロックにプロトタイプの大まかな形を描き写すと、再びブレードの下に置き、最終的な形に近づけていく。この工程では、敏捷な手の動きが求められる。少しでも手元が狂うと、指を失うことになりかねない。

背の高いギロチンのような機械が、耳障りな音を響かせながら睨みをきかせる部屋を離れ、彫刻家のアトリエに足を踏み入ると、少しほっとする。細部まで行き届いた作業をするため、ロレンツォの作業

台には、丸鑿、平鑿、ビュランなどの道具類が並べられている。その数、百本はあるだろうか。まるで、出撃の合図を待つ小人の軍隊のようだ。木製やゴム製のハンマーを使う必要が特になければ、ロレンツォは手のひらでそれらの道具を扱う。木は割れやすい素材なので、大切に扱わなければならない。ロレンツォは、帽子の木型には、きめが細かく柔らかくて丈夫なボダイジュ材を使う。一方、トルソーやディスプレイスタンド、彫像などの場合は、オベチエ材を使う。これは、砂地で育つ珍しい木材で、繊維に二酸化ケイ素の微粒子を含むため、ブレードの切れ味がすぐ鈍る。そこで、刃を研ぐという地味な作業のために、手が届くところに小さな砥石を置いている。鋼鉄製の秀逸な道具をつくるメーカーはバリーに1社しか残っていない。30年間、研ぎながら使い続けたブレードは、もとの半分の長さになってしまった。